

賭け事は介護予防に役立つ

パチンコやマーじゃん、さらにはカジノなど「アミューズメント型」の活動を導入するデイサービス施設が増えているという。確かに、懐かしい唱歌をのんびり歌ったり、手遊びや歌遊びを長閑に楽しんだりするプログラムに比べれば、疑似通貨ではあってもお金まがいのものをやり取りするのは参加者の引き込まれ具合が格段に強くなるのは頷ける。デイサービスで歌なんか歌わせられるのはまっぴら、と思っている男性高齢者などは真っ先に飛びつきそうな気もする。

ところがこうした傾向に規制をかける動きも出てきた。2015年10月16日の日経新聞が「模擬カジノ規制に困惑」という見出しで、同年9月に神戸市が「射幸心をあおりかねない」という理由で娯楽サービスを規制する条例を作り、10月には兵庫県もこれに追随したと報じた。賭け事依存症を引き出す危険があるというのだ。その後10月26日には朝日新聞もこの話題を取り上げ、「介護士施設に『カジノ』効果は」という見出しに、カジノを楽しむ男女の高齢者のカラー写真まで添えて詳しく報道した。どちらの記事も賭け事への懸念とともに高齢者の自立に効果があるという肯定的な意見も載せている。

同じ26日の東京新聞の「本音のコラム」では看護師の宮子あずさ女史がこれを取り上げ、デイサービスに求められているのは機能訓練ばかりでなく社会性の維持も大切で、ゲームにはそうした効果もあるとして、マーじゃんは頭も使い対話もあるからOK、「老いた私なら、風船バレーよりマーじゃんができるデイサービスかな」と推奨している。

さてこの賛否両論をどう考えたらいいだろうか。「賭け」という行為には人に主体的な決断を迫るという点で精神的な強さにつながる積極面と、賭けに溺れて身を持ち崩しかねないリスクもある。年金をパチンコや競輪につぎ込んで生活が破たんしたという高齢者の話も聞く。とはいえ、デイサービスでは現ナマを賭けるわけではない。あくまで疑似通貨を使った遊びの世界である。それにまで「依存症」を心配して規制をかけようというのは、筆者にはいささか行きすぎと感じられる。そこには、福祉サービスの利用者には賭け事などとんでもないという福祉現場に固有の禁欲的な文化の存在が感じ取れる。娯楽に対して抑圧的な劣等処遇原則の残滓だと言ってもいいかもしれない。

一般社会は賭け事についてはよほど寛大になっていて、イギリスのように賭博罪を廃止して、だれもが自由に賭けを主宰できる国さえある。日本の賭博法は古風に厳格で、マーじゃんに1円賭けても処罰されるタテマエになっている。とはいえ、競輪競馬のような公営競技はお目こぼしで、何十万円賭けてもお構いなしというのはいかにもご都合主義である。実際、競輪場に行くと見ると、来ているのはほとんど高齢者で圧倒的に男性。誰もが競輪新聞を手に、耳にちびた赤鉛筆をはさみ、しきりに印をつけながら必死に考えている。考え抜いて買った車券が当たれば大儲け、外れれば破り捨てて紙ふぶき。誰にも文句の言えない自己責任の世界である。これこそ高齢者の主体性の確保に適い、認知症予防の効果も高いと思うがどうだろうか。

(藺田碩哉／日本福祉文化学会顧問)